



画像①「白綾子地檜扇葵模様打掛」
江戸時代・19世紀前半
近江八幡市蔵（前期展示）

特別展

寿ぎのきもの

ジャパニーズ・ウェディング

－日本の婚礼衣裳－

The Beauty of the Japanese Bridal Kimono

令和4（2022）年4月23日（土）－6月19日（日）

主催 奈良県立美術館・朝日新聞社

会場 奈良県立美術館

花嫁を彩った色と意匠でたどる、「幸せを願う心」のかたち

展覧会の趣旨

婚礼は、人生において最も華やかな通過儀礼のひとつと言えるでしょう。それゆえ、婚礼の儀式には祈りと喜びの感情が満ちあふれています。そしてその心情を表現するために、花嫁を美しく彩る婚礼衣裳や、婚儀に用いられる様々な調度品、そしてその場を演出するありとあらゆるものには、幸せを祈る色や形、模様が用いられました。

本展覧会は、とりわけこうしたことが、美しくも洗練された形で行われていた江戸時代から昭和初期にかけての女性の婚礼衣裳や婚礼のしつらえを紹介しようとするものです。

婚礼に対する日本人の思いと考え方が、これらの品々には表されていて、現代においては遠いものになりつつある、美しい祝いの姿をそこに見ることができるのです。作品を通して日本における吉祥のイメージをご覧いただくとともに、これらを生み出した「幸せを願う心」に思いを馳せる機会となれば幸いです。

出品件数（予定）

159件（出品件数の合計） ※会期中に展示替えあり

監修

長崎巖（共立女子大学教授・共立女子大学博物館長）

展示構成

第1章 江戸時代の武家の婚礼

花婿、花嫁の両家の結びつきを堅固にすることが重視された武家の婚礼。婚礼に至る手順や婚礼に使用する衣裳にも厳格な決まりがありました。花嫁は白地で統一されたいわゆる白無垢の衣裳で盃を交わす式三献の儀式に臨み、儀式後に赤（紅・緋）無垢に色直しをし、さらにその後の行事には黒地の打掛を着用したことが資料から読み取れます。この章では江戸時代の武家の婚礼衣裳や資料、調度品などから、盃事（さかずきごと）など武家で重視された儀式やしきたりをひも解きます。

第2章 江戸時代の町人の婚礼

町人の婚礼は武家の婚礼を簡略化したかたちで行われましたが、こうした婚礼をあげることは経済力のある町人に限られました。町人の婚礼では結婚の成立を広く告知し、結婚後の友好を願うために色直し以降に催される宴会が重視されました。こうした背景が色直し以降に着られる華やかかつ多様な婚礼衣裳を生み出したと考えられます。白地・赤地・黒地を基本の色とし、刺繍や絞

で吉祥の意味を持つ模様をあしらった婚礼衣裳の数々を紹介します。

第3章 伝統の継承と革新

明治時代には身分制度が形式上取り払われ、婚礼を挙げられる階層も増えていきました。それに伴い婚礼形式の簡略化と婚礼衣裳の多様化が進みました。白地・赤地・黒地の打掛を着替える「三つ揃い」から、白地・赤地・黒地の振袖を重ね着する「三つ重ね」に変わり、さらには式三献の儀式から黒地の振袖を着用することが一般階層で定着しました。この章では江戸時代からの伝統を引き継ぎつつ、時代に合わせて多様化していった婚礼衣裳の様相をご覧ください。大正四年に着用された北信濃の豪商・田中本家の衣裳や、大正・昭和に京友禅の老舗・千總の夫人が着用した婚礼衣裳なども見どころです。

第4章 幸せを祈る心

「幸せであるように」と祈る心は古今共通のものでしょう。その心情は様々に表現されますが、他者にもものを贈る時には吉祥模様をあしらった掛袱紗が使われ、贈り主の心情が託されました。また子どもの衣服にも健全な成長や将来の成功を願う親の心が伺えます。この章では掛袱紗と子どもの衣服を展示し、その意匠から婚礼衣裳にも共通する「幸せを祈る心」をご覧ください。

▼展覧会の基本情報と来館案内

主催・会場

奈良県立美術館
〒630-8213 奈良県奈良市登大路町 10-6
TEL 0742-23-3968 / FAX 0742-22-7032 / テレホンサービス 0742-23-1700
美術館公式ホームページ <https://www.pref.nara.jp/11842.htm>
ツイッターアカウント @ArtmuseumN フェイスブック @narakenmuseum

会期

令和4（2022）年4月23日（土）～6月19日（日）
※多くの作品については展示替えをいたします。
[前期] 4月23日（土）～5月22日（日）
[後期] 5月24日（火）～6月19日（日）

後援（予定）

NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、奈良新聞社、西日本旅客鉄道株式会社、近畿日本鉄道株式会社、奈良交通株式会社、奈良県教育委員会

開館時間

9時～17時（入館は16時30分まで）

休館日

月曜日

観覧料

一般＝1,000円、大・高生＝800円、中・小生＝600円
※新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、団体割引の設定はありません
※各種割引については次の取扱いとなります

ミュージアムぐるっとパス・関西2022	上記観覧料から200円引
奈良トライアングルミュージアムズの半券等の提示	

※次の方は会期中無料でご観覧いただけます

- ①障がい者手帳等（アプリ含む）をお持ちの方と介助の方1人
- ②外国人観光客（長期滞在者・留学生を含む）と付添の観光ボランティアガイドの方

交通案内

近鉄奈良駅 1番出口から奈良公園に向かって徒歩5分
JR奈良駅 東口バス乗り場から奈良交通バスにて5分「県庁前」下車100メートル

▼会期中の催し

会期中の催し (当館主催事業)

◆講演会「近世・近代の婚礼衣裳 一色と模様に見られる日本人の価値観―」
講師：長崎 巖 氏（共立女子大学教授・同大学博物館長・本展監修）
日時：5月22日（日）14時～（約90分）
会場：当館1Fレクチャールーム（50名・要事前申し込み・先着順）

◆美術講座「“幸福”を表す模様あれこれ―婚礼衣裳と袱紗を例に」
講師：飯島礼子（当館主任学芸員）
日時：6月12日（日）14時～（約90分）
会場：当館1Fレクチャールーム（50名・要事前申し込み・先着順）

[講演会・美術講座の参加申し込みについて]

聴講のお申し込みは4月23日（土）からEメールまたは電話にて受け付け、定員になり次第締め切ります。申し込み方法の詳細は当館ホームページ（<https://www.pref.nara.jp/11842.htm>）などをご確認ください。

◆当館学芸員による展示ガイド
日時：4月30日・5月28日・6月18日（いずれも土曜日）14時～
会場：当館1Fレクチャールーム（定員50名・当日先着順）

◆婚礼衣裳体験イベント「せんとくんとお嫁さんごっこ！」
婚礼衣裳を着たらどんな感じに見えるかな？着付けが完成したら館内のフォトスポットで袴姿のせんとくんと一緒に記念写真を撮りましょう！

日時：5月8日（日）・5月15日（日）・6月5日（日）
10時30分～ / 14時～（各回90分程度）

※着付けを含む一人あたりの所要時間は約15分です。集合時間は参加決定時にご案内します。

会場：当館1F西館ホール内フォトスポット（各回5名・要事前申し込み・応募者多数の場合抽選）
対象：身長120～140cmの児童

※着装した時の見栄え（大きすぎる・小さすぎる）を気にしなければ上記対象身長に当てはまらなくてもご参加いただけます。

※イベント参加には参加者本人、付き添いの方とも当日の観覧券が必要です。

[体験イベントの参加申し込みについて]

参加のお申し込みはEメールにて受け付けます。応募者多数の場合は抽選で参加者を決定します。申し込み期間はイベント開催日より異なります。申し込み方法・イベントの詳細は当館ホームページ（<https://www.pref.nara.jp/11842.htm>）などをご確認ください。

※上記イベントへの参加には当日の観覧券が必要です。

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、イベントの実施・内容を変更する可能性があります。



ギャラリー展示 (予定)

ギャラリー展示「佳き日を彩る―現代の婚礼衣裳」（入場無料）

[協力] 婚礼衣裳 花内屋、公立学校共済組合奈良宿泊所 ホテルリガレ春日野

展示会の会期中、美術館西館1Fのギャラリースペースでは現代の婚礼衣裳や道具を展示します。和装では白無垢や色打掛が定番となりますが、伝統的な色や模様が引き継がれている一方で、従来のきまりごとから一歩進んだ色使いの打掛も加わり、ますます多彩になっています。展示会で紹介している江戸時代～近代の衣裳とあわせて、その違いや共通点を探しながら楽しみ下さい。

取材のご依頼
広報に関するお問い合わせ

奈良県立美術館（展示会企画担当：主任学芸員 飯島礼子）
〒630-8213 奈良市登大路町10-6
TEL 0742-23-3968 FAX 0742-22-7032
museum@mahoroba.ne.jp

広報用画像リスト + 作品の一言解説

◇展覧会広報用に下記の画像を用意しております。ご希望の画像の番号（1～5）をお知らせください。

◇必ず下記の**キャプション**および備考欄の**展示期間**もご掲載ください。

ただし、ルビ（ふりがな）を付ける・付けないの判断と制作年代の掲載は各メディアに委ねます。

◇掲載にあたり作品部分のトリミング、文字載せはご遠慮ください。

No.	画像	キャプション	一言解説	備考
1		「白綸子地檜扇葵模様打掛」 （しろりんずじ ひおうぎあおいもよううちかけ） 江戸時代（19世紀前半） 近江八幡市蔵	近江商人の家に伝わった婚礼衣裳のひとつで、綸子という生地に檜扇と葵の模様を表した打掛です。これとほぼ同じ模様で紅と黒の打掛があり、「三つ揃い」として白、紅、黒の順に着替えたと考えられます。	前期展示
2		「縹平絹地桐立木模様打掛」 （はなだへいけんじきりたちきもよううちかけ） 江戸時代（19世紀前半） 共立女子大学博物館蔵	吉祥模様とされる桐と鳳凰の組み合わせから鳳凰を省いて、桐の模様を背面全体に表した打掛です。婚礼衣裳には白・赤・黒の三色のほか、このような青系統の地色のものもありました。	後期展示
3		「赤綸子地竹梅立涌鶴模様打掛」 （あかりんずじたけうめたてわくつるもよううちかけ） 大正4年（1915）使用 田中本家博物館蔵	北信濃屈指と言われた豪商・田中本家で大正4年5月に行われた婚礼の衣裳のひとつ。竹と梅のモチーフを立涌模様に巧みに落とし込み、その上に鶴が舞う姿を配置した華やかな打掛です。	後期展示
4		「白変わり綾地浜松模様打掛」 （しろかわりあやはままつもよううちかけ） 昭和14年（1939） 西村家十四代夫人使用 千總蔵	京友禅の老舗・千總は桃山時代から江戸時代にかけて法衣業において成功を収めた家です。この打掛は十四代夫人の婚礼衣裳のひとつで、光琳風の松がおおらかな雰囲気醸し出しています。	前期展示
5		「黒縮緬地松梅御所車橋模様振袖」 （くろちりめんじ まつうめごしょぐるまはしもよう ふりそで） 昭和16～20年（1941-1945）頃使用 東京家政大学博物館蔵	近代になると従来の白無垢ではなく黒地の振袖が式三献（三三九度）でも着られるようになり、大正時代から昭和時代前半にはこの姿が一般階層の婚礼衣裳の主流として定着しました。この振袖は昭和16年～20年頃に使用されたものです。	通期展示